

Alert

反天皇制運動

8

号

[通巻 390 号]

2017 年
2 月 7 日発行

第 8 期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert

●動き始めた天皇「代替わり」スケジュール 天皇も天皇制もやめろ！——*2

反天ジャーナル ●——岡田健一郎、虚偽・ヘイトは「意見」ではない、映女*3

状況批評 ●こんなものを放置しておくのとロクなことにならない——加藤克子*4

太田昌国のみたび夢は夜ひらく(81)

●トランプ政権下の米国の「階級闘争」の行方——太田昌国*7

マスコミじかけの天皇制(08)

●民主主義に皇室制度はいらない！——〈壊憲天皇明仁〉その6——天野恵一*8

書評 ●「日本陸軍のアジア空襲―爆撃・毒ガス・ベスト」——梶川凉子*9

ネットワーク ●警視庁機動隊の沖縄への派遣を問う

——住民監査請求から訴訟へ——岩川 藍*10

野次馬日誌——*11 集会の真相——*14 反天日誌——*16 集会情報——*16

時の区切り方というのは大方権力が握っているものである。

権力は都合よく時間を刻み、区切ることによって民衆を支配してきた。誰にでも均一に流れると信じて疑わない物理的時間は私たちの生活を縛る装置として機能し、社会秩序を形成してきた。これに対して私は主観的時間の存在を考える。主観的時間は物理的時間の裂け目から時間の伸び縮みを作り出すことによって人の可能性を引き出すのではないかと。実は相対性理論においては空間だけではなく時間も所与の客観的尺度ではない。

2020 年という区切りはいままさに権力が都合よく民衆支配を実行するために出してきた。様々な課題が 2020 年をターゲットとして設定されている。これまで三度潰えた共謀罪は 2020 年東京五輪のテロ対策という名分で再浮上している。

だから天皇代替りも 2019 年でなければならないのだ。ヒロヒトの死がソウル五輪と重なることを避けるための延命措置が水面下で必死に行われたが、アキヒトで繰り返すことは許されないのだ。2019 年に安定的に代替りして 2020 年を迎えるという時間操作のために天皇の生前退位問題はいま出てきている。天皇の人権などというレベルの問題では決してない。

私たちはそんな権力の都合のいい時の区切りを決して認めない。ことは時間をめぐるヘゲモニー争いなのであり、東京五輪を再度こうした視角で捉え返すことで、神宮から追い出されようとしている人たちの時間を取り戻す闘いが自ずと見えてくるのかもしれない。(宮)



250 円

●定期購読をお願いします(送料共年間4000円)

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net



今月の
Alert

動き始めた天皇「代替わり」スケジュール 天皇も天皇制もやめろ!

明仁自身が主導して始まった「代替わり」状況のなかで、その天皇の意思をうけて具体的にそれをどのように進めていくか、政府と国会の動きが急である。

明仁の退位と新天皇の即位の日付をめぐっては、それを二〇一九年の元日におこなおうとする政府と、「それは困難」とする宮内庁との間で、若干の「応酬」もあったが、二〇一八年中の退位と新天皇の即位（いわゆる「踐祚」）、二〇一九年の「即位の礼・大嘗祭」という方向性が一方的に示された。

「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」は、一六人へのヒアリングを経て、一月二三日に「論点整理」を公表した。三月中には最終答申が出る見込みだという。その結論は、やはり安倍官邸の規定方針と言われる「一代限りの特例法」と論議を集約するものだった。

これに先立って国会では、衆参両院の正副議長が「国会内で与野党の幹事長らと会談し、天皇陛下の退位に関する法整備について今後の議論の進め方を協議した。正副議長は、二月中旬以降に各党の意見を個別に聴取し、三月上旬をめぐって意見集約したい方針を伝え、各党は了承した。……政府は春の大型連休前後に退位に関する関連法案の提出を目指しており、国会審議の前にできる限りの合意形成を図りたい考えだ」（毎日新聞、一月二〇日）。

衆院議長の大島理森は、各党にたいして「天皇の地位は国民の総意に基づくもので、その総意を見いだすことが、国民の代表機関の立法府の重大な使命だ」と呼びかけている。「皇室の問題を政

争の具にしてはならない」「静かな議論を」という論理による、完全な談合である。

けれども、一月二六日の衆議院予算委員会においては、民進党の細野豪志代表代行が質問時間五〇分の約七割を天皇退位問題に割いた。

細野は「ご譲位に国民の九割が賛成をしているが（有識者会議の）ヒアリング対象者一四人のうち六人が反対意見を述べている。バランスが悪くないか」「天皇陛下を含めた皇室の皆さんの人権をどう考えるのか」と安倍に質問している（産経電子版、二月二六日）。民進党などの野党の主張は、「二代限りの特例法」ではなく、「皇室典範の改正が本筋」というものだ。かつては天皇の「公的行為」の違憲性を問題にしていた共産党も、いまや国会開会式へ出席して天皇に頭を下げており、天皇制に批判的な議会内勢力はもはや不在である。天皇の考えを「しっかり付度」すべきと細野が言い、それは「玉座を胸壁となすこと（天皇を盾に相手を攻撃すること）につながる」と安倍が答える。安倍の言葉は、尾崎行雄が桂内閣を弾劾したときのもので、一〇〇年以上も前のやりとりが再現したような言論状況に、空恐ろしさを感じるばかりだ。そして、私がこのことを知ったのは「産経抄」というコラムによってであって、しかもそこでは「陛下のご意向を反映させるばかりでは『天皇は国政に関する権能を有しない』と定める憲法と矛盾する。政府が『付度』で突き進めば、国家権力の恣意的行使を制約する立憲主義にも反することになる」（産経新聞、一月二八日）などと言われていることも、使えるものなんでも使うご都合主義だけが浮かび上がる。

いま現出しているのは、まさに「天皇翼賛国会」そのものである。私たちはもちろん、天皇の退位それだけに反対しているわけではない。それが、天皇制の安定強化のためになされることに反対なのだ。われわれは「天皇も天皇制もやめろ」とはっきりと言わなければならない。

こうした中でわれわれは、2・11反「紀元節」行動をもって、今年の反天皇制の街頭行動を開始する。そして3・11の「東日本大震災追悼式」にたいしては、今年も反戦反天皇制労働者ネットワークのよびかけで準備が開始されている行動に合流し、東電前で声をあげていきたいと考えている。この追悼式典だが、震災発生後五年がすぎたので、これまでのような天皇出席行事ではなく、今年から秋篠宮が出席することになった。普通なら、天皇行事から皇太子行事への「格下げ」になるところだが、一つ飛ばして秋篠宮となるのは、もつろん新天皇の即位後、秋篠宮が皇位継承者第一位になるからで、実質的な「皇太子化」の先取りというべきものだろう。

そして明仁天皇は、二月二八日から一週間、ベトナムとタイを訪問する。詳しく展開する余地はないが、これが、昨年のフィリピンに続き、日米安保体制のもとでの対中国戦略と深く関わっていることは疑いないところだろう。そして、またベトナムは、「太平洋戦争」開戦前夜の一四四〇年に日本軍が侵攻し、強制的産米供出政策によって大量の餓死者を出した場所でもある。「生前退位」にもかかわらず、あるいはそれゆえに、天皇（皇族）はきわめて活発に動いている。天皇制反対の行動を、ひとつひとつ持続していこう。（北野蒼）

それでも「キレイごと」を

憲法の授業をやっている人間がいつのも何だが、「なぜみんなに人権があるのか」を説明するのはとても難しい（だから、わりとごまかしてきた）。「そもそも人権自体が、『この世に無用な人間などいない』という、常識に反する反功利主義的論理に基づいている。他人の価値と自分の価値を確認できないで生きる今日の人々にとって、人権が疎遠に感じられるのは当然なのである」（毛利透『表現の自由』四四頁）。そもそも憲法というのは理想（というか「キレイごと」）を並べた文章だが、「誰もが生まれながらに自由で平等である」というのは最高度の「キレイごと」ではないか。

だが、トランプ大統領就任により、米国が何だかエライことになっている。とりわけ特定七カ国出身者の入国拒否をはじめ、人権問題は深刻である。これに対し、全米各地で抗議行動も行われている。米国は国内外で口くでもないこともやらかすが、こういう「社会の復元力」的な動きはスゴいなあと思ってしまう。翻ってわが日本はどうか。難民受入などの点では米国より昔からよほどひどい。だから「偽善」といわれようとも、やっぱり「キレイごと」としての人権をきちんと授業で説明していいかなあかな……と思う今日この頃である。

（岡田健一郎）

先取りなら追従ではない？

沖縄・高江の基地建設反対運動を誹謗中傷した東京MX TVの「ニュース女子」。この番組の司会・長谷川幸洋の肩書きが、「東京新聞論説副主幹」ということで驚いた人も多いだろう。この長谷川は、『そこまで言って委員会NP』（読売テレビ）や「現代ビジネス」（講談社）で、右派「言論」をばらまきつつ、政府の各種の審議委員に名を連ねる。

最近では、「策源地攻撃能力（敵基地攻撃能力）も備えるべき」と主張しているし、日米首脳会談を前に、米側が「日本は防衛負担を増やせ」と要求するだろうから、「そうなら、米国が言い出す前に日本が『防衛負担を増やす』と言つべきだ。……米国に言われて増やすようでは、いつまで経っても対米追従思考から抜け出せない」との妄言を吐いている。

「ニュース女子」への批判の声は拡大し、「東京新聞」は二月二日に「深く反省」の記事を載せ、この副主幹への「対処」も明言した。

トランプ政権誕生後の大統領に抗する米国メディアや世論もそうだが、こうした対抗言論が、民主主義を保つ根幹でもある。そういう意味では、日本でもまだ民主主義は死んでしまっていないのだろう。もっとも相手が天皇制となると……。

（虚偽・ヘイトは「意見」ではない）

映画「未来を花束にして」

『SUFFRAGETTE』が原題。日本題？ですが、女性参政権運動を闘った労働者の映画です。トランプ大統領に牙をむいた名優メル・ストリプが指導者エリン・パンクハーストを演じ、「市民的不服従」の大義を訴えます。が、主役はキャリア・マリガン演じる洗濯女モード。最下層労働者として一四歳から朝から晩まで働き夫や子どもを面倒をみる毎日。偶然サフラジエットの行動に遭遇し、運動に導かれ政治的に目覚めていく過程が描かれます。C・マリガンの演技が見物。活動家の自伝を探し出し役作りの参考にしたほど。

映画で強調されるのは、中産階級の運動とされる参政権運動の中心が、産業革命を担った女性労働者であったことです。

「市民的不服従」の手段はまこと戦闘的。電線切断、郵便ポストや家屋の爆破、度重なる投獄とハンストによる抗議や強制食餌……。治安維持法の対象でした。非暴力直接行動は、核・米軍基地撤去を勝ち取ったグリーンナムの女たちに引き継がれます。運動の色として紫・白・緑が女たちを彩ります。女性参政権を拒否したアスキス首相の曾孫が出演しており、エメリンの孫ヘレン（カメオ出演）に謝ったとも。ダービーで国王の馬に飛び込んだ活動家の葬儀行進の実写映像が最後を飾ります。

S・ガウロン監督等映画の女性陣に敬意！（映女）

状況批評

思想・状況批評

こんなものを放置しておくとかくなことにならない

加藤克子 (立川自衛隊監視テント村)

大相撲ファンである。一月八日の初場所第一日をTV中継で観戦した。最後の約三〇分は「天覧試合」になった。「天皇皇后両陛下のご入場です」の館内放送に應えて人びとはそろって立ち上がり拍手した。天皇・皇后は二階席の客にも目配りをし、手を振って応えた。「翼賛」の空気が両国国技館を満たした。外国人観光客はエスニックな見せ物に大喜びだった。着席したままの客はほとんどいなかった。観客の中に反戦派や反天皇制派はどれだけののだろうか? 「場」を作りあげる警備当局の用意周到な準備があつたにちがいない。あの会場に「みなさん天皇制をやめましょうよ」というよびかけの澄んだひと声を響かせたかった。それは勇気の要る行為だったと思う。だがそのひと声があつたら、どんなにめでたかつたことだろう。

日本に生きる者の人生はそれぞれ天皇制にいくらかは彩られているのではないかと思う。戦後、まだ小学生の頃、立川にも昭和天皇の全国キャラバンがやってきた。学校から隊列を作ってでかけ、農事試験場の門前に並んだ。天皇を見るとバチがあたる、という話だった。天皇は私の前を歩いて通ったのだが、その姿の記憶がない。きっと私は頭を上げなかったのだ。父に連れられて、新年「一般参賀」に出かけたこともある。

戦争に負けて、皇太子の家庭教師は民主主義国アメリカの女性、ヴァイニング夫人になった。女性が参政権を得て、母は「紅一点」のスロー

ガンをにかけて市議会議員に立候補した。長年選挙管理委員を務め、母親は晩年「勲五等」を受勲した。「母が天皇にはめてもらう必要などない」——受勲で生涯が意義あるものとなる日本の常識に腹が立った。現天皇夫妻はほぼ同世代である。別世界の人で、しかし常にひっかかる存在だった。そして物心ついてこのかた、天皇制という制度が納得のいくものだったことはない。

●天皇制の理不尽と暴力が立川にやってきた

天皇制の暴力に否応なく直面した経験を紹介しよう。今から三〇年前のことである。

立川基地への自衛隊移駐は一九七二年。三年間の暫定利用を名目にしてきた。そんなのウソだ。居すわるにちがいない——立川テント村を続けた根拠はそこにあった。

「平和利用案」作りの委員会傍聴に市役所に行くと、「立川競輪の利益で立川基地跡地を買えばよい。そこに巨大な競輪場を作り、そのもうけで横田基地を買おう」という意見が堂々とまかり通っていた。基地と競輪の両輪で戦後立川の繁栄は築かれたのである。

やがて昭和天皇在位五〇年記念公園計画が持ち上がり、逗子と立川で誘致合戦が始まった。背景には立川基地の三分割(地元・国・保留地、

地元分は有償」という国の方針があった。「公園を地元分にすれば買う必要がない。天皇なら建設費は国が出す」——商工会議所や地元自治会連合会が先頭に立った誘致署名は一カ月半で五万に達し、勝利した。国の部分は「広域防災基地」の名称で、居すわった自衛隊は新滑走路とともに最新式の基地を建設した。その南と西に広がる百八〇ヘクタールの広大な天皇公園は、震災や内乱など首都の緊急事態のとき、全国から物資と兵員三万人余りが集結する場と位置づけられている。米軍が垂れ流したガソリン廃液が眠る土地。その上に桜並木が植えられ、池が作られ、広場や四阿が作られていった。たしかに「天皇制」は威力を持っていた。

秋に開園式典が予定された八三年春。黒い背広姿の十人あまりの私服警官の集団が町を徘徊するようになった。初夏のある夜、新滑走路を使うC-130ジェット機の飛行妨害をめざして建設された砂川の反戦旗鉄柱が、何者かに切断された。八月、基地監視行動中のメンバーが拘束された。九月、反対運動封じ込めのため、全市の公園が警察に借り占められていることが分かった。

天皇制とはこういうものか?! 私たちは日々学び、対策を考えた。全戸配付のために作ったリーフレットを分散して持ち帰り、官憲の押収から防衛した。「一過性のものだ、しばらくおとなしくしていよう」という声がなかったわけではない。だが、現に繰り広げられている理不尽と暴力に立ち向かうことなくして自由も民主もあり得ない、と思われた。女性たちの団体「女たちの連絡会」が、天皇を迎える学童の日の丸動員に反対し、市役所玄関前で署名活動を始めた。開園式当日には立川市職労が時限ストを打った。天皇制戒厳令が少しづつこじ開けられていった。式典数日前、隣町の公園から出発したデモ隊は、「ア

ジアの人びとと 世界の人びとと手をつなぐために 私たちは天皇なんかじゃない」と書いた大横断幕をかがけていた。閉塞感の中で想像力が羽ばたいた。かつてフランスで発せられた言葉「占領下バリは自由だ」に力づけられ獲得されたスローガンだった。

開園式当日、テント村事務所屋上にへりから機動隊員が降り立ち、ベランダから侵入、窓を破ってでっちあげ容疑の自宅捜索が行われた。留守をしていた友人が、割れた窓から手を差し出し「入るなら私の腕を切って入ってこい」と抵抗した——数年前、彼女を慰ぶ会ではじめて聞いた逸話である。

立川での天皇公園反対闘争は、戦後はじめての大衆的な反天皇制の闘いだったのではないかと思う。昭和天皇の死に引き続く葬儀と即位をめぐる攻防の端緒を切ったもので、葬儀の日には、八王子で千人を越える大デモンストレーションが展開されている。

●天皇の「おことば」と一一・二〇デモ——新たな状況・条件の中で

天皇の「退位のおことば」に対して、「天皇制自体をやめようよ」の声があがるのは至極当然である。

昨年一月二〇日、井の頭公園を出発点に展開されたデモに対し、周辺自治体ホームページや学校は、「吉祥寺周辺に近寄るな」という指示を出した。デモ隊百人は、襲撃—破壊—暴力に晒され続けた。「象徴にならない天皇制なくせ」の大横断幕は、いくらか進まないうちに破られ、奪われた。宣伝カーのフロントガラスが割られ、マイクのコードが引きちぎられた。解散地点に着いたとき、プラカードはほとんど残っていなかった。官憲—右翼が目指したのは「反天皇制デモ」を人々

の目の前から消し去ることだった。いやもう一つ。人々を脅し、恐れさせ、屈辱と萎縮そして閉塞状況に追い込むことである。

安倍首相は、共謀罪の法制化が「オリンピックのために必須だ」と語った。退位と新天皇の即位をオリンピック前に済ませる算段が始まっている。天皇制について庶民が語るのには不謹慎・不敬だという雰囲気を作られつつある。天皇とオリンピックが新たなタブーと化してこの社会の闇が深まろうとしている。

●声をあげよう、デモしよう——「私たちに天皇制はいらない」

アニメ『この世界の片隅に』が昨年のキネマ旬報第一位になったそう。第二位は『シン・ゴジラ』。立川・広域防災基地が準主役級で登場し、立川の映画館は満杯になった。あやかった市当局が「防災基地ツアー」を募集し人気を博した。

この両方に天皇も皇居も登場しない。前者では戦時中の庶民の暮らし、生きるための工夫が克明に描かれているのだが、戦争を始めた者、そして若者たちが誰に命を捧げたかが描かれていない。後者では、オリンピックに向かう東京のビル街は破壊されるのに、あの広大な皇居は登場しない。しばらく前に読んだ小松左京の『日本沈没』『続・日本沈没』にも天皇や皇居は登場しない。日本では、天皇制は映画でも文学でも、描くことができない。アンタッチャブルなままだのである。欺瞞と矛盾と隠蔽、そして暴力——これが天皇制の真の姿である。こんなものを放置しておくとかロクなことにならない。安倍と対比して「天皇の人格」に心酔している人々にもちゃんと考えてほしいものである。

天皇公園開園の前年、瀬戸内海の小さな島・菅島にC-1ジェット機が墜落した。初飛来が延期され、私たちは現地調査に出かけた。山頂への道に迷った私たちは、小さな川のはたりに一人の少女に出会った。問われて「東京から来た」と答えると、少女は「天皇様が住んでいらっしゃるところ」とつぶやいた。現地調査で鮮烈な印象に残った場面である。おそらく祖母などからくりかえし聞いた話なのだ。東京は天皇が住んでいるところである。あの少女は、天皇から自由になってその後の人生を送っているだろうか、とても気になる。

テント村は、砂川の旧拡張予定地の一角を耕している。自主耕作の仲間、すでに亡くなった在日のNさん。介護施設に見舞いに行くと、いつも思い出話をしてくれた。私は孫娘のように彼女の話聞くのが好きだった。その一つをよく思い出す。

西方の港に近い集落に住んでいたとき、朝鮮人にも召集令状が来るようになった。令状を受け取った家の母親の泣き声が外まで響いた。集落の人々はその声を避け、遠回りをして家に帰った。出征の日、集落をあげて港に見送りに行った。戦争が終わり、出征した若者たちが帰ってきた夜、人々はあるだけの食べ物と酒を持ち寄って祝いの宴を開いた。夜を徹して歌い踊った。——Nさんの話はまるで幻灯映画のように胸に焼きついている。

天皇制はだれにも拘束をもらすが、その一番の被害を受ける者たちは社会の底辺に暮らす人々、差別された人々である。

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく81

トランプ政権下の米国の「階級闘争」の行方



就任式から二週間、米国新大統領トランプが繰り出す矢継ぎ早の新たな政策路線に、世界じゅうの関心が集中している。この超大国の、経済・軍事・外交政策がどう展開されるかによって、世界の各地域は確かに大きな影響を受けざるを得ない側面を持つものだから、関心と賛否の論議が集中するのは、必然的とも言える。個人的には、私は、(とりわけ) 米日首脳がまき散らす言葉に一喜一憂することなく、自らがなすべきことを日々こなしていきたいと思う者だが、それでも一定の注意は払わざるを得ない。

トランプは、米国の外に工場が流出したことで「取り残された米国人労働者」や「貧困の中に閉じ込められた母子たち」とは対照的に、ひとり栄えるものの象徴として「首都ワシントン」を挙げた。そこに巢食う小さなエリート集団のみが政府からの恩恵にあずかっているとし、それを「既得権層」と呼んだ。就任演説を貫くトランプから判断するなら、現代資本主義の権化たる「不動産王」トランプは、まるで、労働者階級のために身を粉にして働くと言っているかのようである。叩き上げの「新興成金」が、伝統的な支配構造に一矢を報いているかに見えるからこそ、この状況が生まれているという側面を念頭におかなければならないと思える。

具体的な政策をみてみよう。米国労働者第一主義(ファースト)の立場からすると、労働力コストなどが廉価であることからメキシコに製造業の生産拠点を奪われ、国内雇用を激減させる要因となった北米自由貿易協定(NAFTA、スペイン語略称TLC)も、

トランプにとっては攻撃的となる。協定相手国であるメキシコとカナダとの間での、離脱のための再交渉の日程も上がっている。思い起こしてもみよう。メキシコ南部の先住民解放組織「サパティスタ民族解放軍」は、この協定は三國間の関税障壁をなくすことで、大規模集約農業で生産される米国産の農作物にメキシコ市場が席捲され、耕すべき土地も外資の意のままに切り売りされると主張して、その発効に抵抗・抗議する武装蜂起を、一九九四年一月一日に行なった。発効後一五年目の二〇〇八年には三國間の関税が全面的に撤廃され、予想通りにメキシコ市場には米国産農産物が押し寄せ、メキシコ農業は荒廃し、農で生きる手立てを失った農民は、仕事があり得る首都メキシコ市へ、そこでもだめならリオ・格蘭デ河を超えて、米国へと「流れゆく」ほかはなくなった。

グローバリズムを批判し、これに反対するという意味では、トランプとサパティスタは、奇妙にも、一致点を持つかに見える。だが、子細に見るなら、他国の

民衆をねじ伏せる経済力を持つ米国の利益第一主義を掲げるトランプと、一般的にいつて多国籍企業の利益に基づいてこそ自由貿易協定の推進が企図され、それは経済的な弱小国に大きな不利益をもたらすという、事態の本質に注目したサパティスタとは、立脚点が根本的に異なっていると言わなければならない。

トランプの反グローバリズムの主張を色濃く彩る排外主義の本質は、メキシコとの国境線をすべて壁で塞ぐという方針にも如実に表れている。総距離三二五〇キロ、うち一〇五〇キロにはすでにフェンスがつくられている。一〇〇万人を超えるというメキシコからの「不法」移民に「米国人労働者の職が奪われて」おり、彼らは「犯罪者」や「麻薬密売人」だから国境を閉鎖して「不法」侵入を防ぐというトランプの方針は、米国人が持つ排外主義的な感情を巧みにくすぐっている。今はご都合主義的にも反グローバリズムの立場に立つとはいえず、資本制社会の申し子というべきトランプは、米社会に麻薬の最大需要があるからこそ供給がなされているという「市場原理」を忘却して、メキシコにすべての罪をなすりつけようとしている。

歴史的経緯や論理を無視して「アメリカ・ファースト」という感情に基づく発想でよしとするトランプは、今後も「一〇〇日行動計画」を次々と打ち出してくるだろう。「予測が不能な」その路線如何では、世界は(自滅)の崖っぷちを歩むことになるのかもしれない。私は、米国の外交路線は「トランプ以前」として決してよいものではなかったという立場から、新旧支配層の対立・矛盾が深まるであろう米国の「階級闘争」の行方を注視したい。

(2月5日記)

マスメディアの制
天

08

民主主義に皇室制度はいらない！ 〈壊憲天皇明仁〉その6



私は、かつて「戦後七〇年安倍談話」などをめぐって、安倍晋三政権をイージーに神道主義右翼に還元して批判するだけでは、私たちが「落とし穴」に落ちてしまうことにならないかと主張したことがある。「アジア解放の聖戦」などと、かつての侵略戦争をロマン化するとはしなかった、その談話を前に、私のその論文の結論は以下の通りであった。

——右翼的レトリックをまぶして自己矛盾を内包したこの歴史観は、それなりに一つの「体験化」されつつある。それ自体を独自の支配のイデオロギーとして、緻密に批判的に検証し抜く作業こそが、今、果されなければならぬ——（『皇室情報』の解説みたび35）『反天皇制運動カーニバル』（16年1／12号）。

今、天皇の「生前退位」をめぐって、とりあえずアキヒト天皇一代に限って退位を可能とする法律づくりへ向かって、予定通り走っている安倍政権をめぐるマスコミの操作的言説を前に、あらためて、この思いを強くしている。そこには、「日本会議系伝統主義右翼安倍」対「リベラルなアキヒト天皇」の対立という一面が、ひたすらクロースアップされ続けている。

もともとスッキリ鮮明に、その対立を描き出し、安倍政権をストリートに批判し、自分がイメージしている天皇一族側に寄り添いながらヨイショし続けているのは女性週刊誌である。

『女性セブン』最新（2／10）号のタイトルは、ズバリ、「皇室と安倍首相『10年の思い』決着の時」である。そこには「皇室典範」改正を含めた恒久的な制度設計を希望している天皇の意思を踏みにじる悪玉安倍政権批判が語られ、こう論じられている。

「陛下、ひいては皇室と、安倍首相の相容れない関係は今始まったことではない。安倍首相が初めて内閣総理大臣の席に座ったのは、〇六年九月のことだが、相克の源流はそこからさらに一年さかのぼる。／『当時、小泉純一郎政権下では、女性・女系天皇容認の議論が進められ、法案化寸前でした。長らく男子が誕生しなかった皇室において安定的な皇位継承の幅が広がるもので陛下の期待もあった、ところが当時の官房長官だった安倍さんの主義主張とは違うもの。結局、首相就任直前に悠仁さまが誕生されたのを契機に議論が潰れてしまった』（前出・政治記者）」。

『女性自身』の最新（2／14）号は、元首相（現民進党幹事長）の野田佳彦のインタビュー中心の記事がある。タイトルは「美智子さまが私に語られた陛下の願い」である。それは「一代限りの特例法」をめざす安倍政権は、陛下の「お気持ち」にそってない、民進党の「皇室典範改正」による「恒久的制度」づくりの方が、天皇夫妻の希望をかなえるものだという内容。その記事の結びではこうだ。

「両陛下の『願い』は、ただ皇室が国民に寄り添う存在であり続けること——退位問題を論議するとき、その両陛下の『願い』を忘れてはならないだろう」。ミッチーブーム（五〇年代末）に便乗して、皇室ヨイショで売らんかな記事満載で、つくりだされた「女性週刊誌」が今日この調子なのはともかく、安倍政権の軍国（国家）主義に批判的なマスメディア（新聞でいえば『朝日』『毎日』『東京』の論調）が、ほぼおなじ水準であるのは、どういう理由か。

一つだけ引こう。一六年二月二九日の『朝日新聞』

社説（「一代限り」のおかしさ）。その結論はこうだ。「一代限りの特例法は、当初から政権間で取りざたされている案だ。典範改正を避けたい意向に沿い、結論ありきでことを進めているのであれば、『有識者』の名に値しない」。

安倍首相が男系男子の「万世一系」イデオロギーの信者であることは、事実である。だから、「皇室典範」の改正までは、「退位」問題で手をつけたくないと考えているだろう。

ただ、「国民に寄り添うリベラル天皇（一族）」VS「国体」破壊の自由意識を持った天皇による「退位」は許さないという神道主義右翼（日本会議系）イデオログに引きずられた安倍政権。こうした対立のひたすらなるクロースアップが、天皇にすがって安倍軍拡政権の暴走にブレーキを、とでもいった倒錯的ムードを、反安倍政権の運動の中につくりだしてしまっている（国家権力の最高機関にすぎない奴隷根性で権力をたたかえるか！）。キチンと考えてみよう。安倍政権の改憲案は、天皇大権の全面復活（大日本帝国憲法の復元）などといった内容ではない。明記された国事行為にのみ限定されているはずの天皇の活動（公的行為）の全面拡大という解釈改憲の積み上げによる改憲構想では、天皇と安倍自民党は歴史的に共同歩調をとっている。さらには、とりあえず一代であれ「生前退位」を合法化という政権の路線は、生前退位はダメとする神権天皇主義イデオログ路線ではない。

皇室の安定的維持の二つの方法の対立の二極のクロースアップこそが、アキヒト・メッセージは違憲（民主主義に超特権的奴隷制度である皇室制度はいらない）というまっとうな少数派の主張の存在を隠蔽しているのである。百％「復古」とはかなりずれている。安倍政権と象徴天皇の共存する政治的土俵をみずえ、象徴天皇制国家の全体を批判する運動的視座を！

書評

竹内康人著 社会評論社刊

「日本陸軍のアジア空襲——爆撃・毒ガス・ペスト」

梶川涼子

この欄は「書評」であるが、以下の文は「図書感想文」「感謝文」ととっていただきたい。

私は小学校二年生のときにあの「大本営発表、本八日未明……」放送を聞き、一九四五年の七月に神奈川県平塚市で米軍による空襲を体験し、八月敗戦の日を迎えた。小學校生としての戦争体験で、小学校の所謂全体主義教育と空襲の恐怖の記憶が先行して、日本軍の戦闘行為については詳しくは知らずとしないで過ごしてきた。この竹内さんの本を読んでいくつも驚いたことがあった。

①日本陸軍による満洲空爆は早くも一九三一年（柳条湖事件のあった年）から始まっていたこと。
②敗戦時に軍隊や政府関係は証拠書類の焼却を相当徹底的に行ったと聞き及んでいたが、多数の記録が現存していたこと。③とはいえ、時間も経ち、入手困難になっている文書・写真類が竹内さんの手で多数集められていること。④毒弾に関する記録こそ殆ど焼却されていたであろうと思ひ込んでいたこと。

竹内さんは浜松出身で、浜松発の日本陸軍の空爆の歴史を追いかけて、ここまで追いつめてこられたのだ。浜松といえばブルーインパルスの母空港としての自衛隊基地の認識でしかなかったが、日本陸軍が国内各地に飛行隊を組織して教育と空襲拠点の第七連隊として立川から移駐し、一九三四年に陸軍飛行学校の名で飛行術、爆撃術の研究と戦地へ発進する基地としての役割を果たしていく。後には毒薬（ガスのみではない）による攻撃の研究と貯蔵なども担っていく。戦況が不利になるに従って、「特攻隊」の訓練も行った。

この本が出版されたことを新聞広告で知ってすぐ社会評論社の新さんに注文した。以前に竹内さんが浜松発で何波も実施された重慶爆撃について語られたときに、日本の空軍はあの遠い重慶まで爆撃に行ける力を持っていたのか、というのが認識不足の私にはびっくりであったからだ。そしてもう一つ、軍基地としての「浜松」はずっと私の記憶のなかで忘れられない地名であったからだ。

それは、八四ページまできたときに、突然はつきりと目に入ってきた。「浦田さん」と「梶川涼子」の字が。重慶爆撃のことを竹内さんから聞いた折に、「子ども時代に大好きだったお兄さんが派兵されていた満洲から急に帰国し、浜松から平塚の私の家に来て、みなに別れを告げ、その後すぐにブリキで手作りした箱に、当時どこでも入手できなかったバッテリーをぎっしり詰めて送ってきたこと、母がすぐ礼状をだしたが、浜松から『移動してここにはいない』旨の付箋が貼られて帰ってきた。それまでは満洲のどこにいても軍事郵便は必ず手許に届いていたので、内地なのに、と家族で話し合った。それから間もなく彼は特別攻撃隊『富岳隊』の一員として戦死したようだ。だから私にとって浜松は特別の地名なのだ」と話した。竹内さんはそれは書いておくようにと言われた。実はもう書いてあった。このことを以前「市民の意見30の会」の事務局にいたとき、吉川勇一さんに話したら、「それは書いておきなさい」と言われ、ニュースに「浦田さんのこと」として掲載した。竹内さんにその抜き刷りをお送りしたが、それからもう何年も経つ。その文を書くときに、大阪に

ご存命だった浦田さんのお姉さんに詳しい話を聞きに行った。そこで私たちが知らなかった家族の歴史を知ったのだが、竹内さんは「富岳隊」の編成や浦田さんがラモン湾でいつ死んだのかや、彼の兄のことまでを書き留めてくれた。

私が最初に「感謝文」と言ったのはこのことで、「浦田さん」の名が書籍に活字として載ったことがとてもうれしかったからだ。こういう固有名詞が外にも出てくるが、大きな歴史の跡を問う記録のなかで、個人の記憶にしかなかった人びとの跡を、数字のなかに埋もれさせないで刻印しておいてくれた竹内さんにありがとう！と言いたい。

たくさん日本軍による空爆写真が挿入されている。飛行機から放たれた爆弾が空中を飛んでいく画像から目が離されず、しばしば見入った。タマの先にいるのは「人」なのだ。こういう写真の数々で空襲の戦法や成果を軍はさんざん研究したのだろう。私が思うのは、それなのに私たちが米軍の空襲に身を曝すことが目前になったとき、それは一九四三〜一九四五年ころだが、隣組の主婦たちを集めて在郷軍人という人たちが屢々防空訓練というのをやった。あれは全くの茶番だったと思う。空から降ってくるものに梯子乗りやバケツや縄を竹にくくりつけた火叩きなどで対抗できるものではない。判っていたはずだ。

特攻技術やペスト菌まみれの鼠を降らす研究までもしていた浜松航空隊を、いまでも許すことができない。アジアの人だけでなく、同国人をもたくさん殺した戦争だったのだ。

警視庁機動隊の沖縄への派遣を問う——住民監査請求から訴訟へ

岩川 藍 (警視庁機動隊の沖縄への派遣中止を求める住民監査請求実行委員会／辺野古リレー)

これまでの流れ

二〇一六年七月▼六都府県から約五〇〇名の機動隊が約五カ月間、高江ヘリパッド工事の強行を支える。

二〇一六年一〇月▼東京都民三一四名と弁護士六七名で、警視庁機動隊の沖縄への派遣中止を求める住民監査請求を申立てる。

二〇一六年十一月▼監査請求「却下」の通知を受理。二〇一六年十二月▼結果を不服とし、請求人の中から改めて一八三名の原告団と六一名の弁護士団を組織し、東京地裁に提訴。

住民監査請求は、地方自治法二四二条に定められた住民自治に基づく制度の一つです。地方自治体の首長や職員が、違法または不当な行為によって、地方自治体ひいては住民に金銭的な損害を与えた、ないしは、その可能性がある時に、住民が、その損害の防止や回復措置を監査委員に請求することができます。しかし、東京都監査委員会は、自民党の都議、公明党の都議、常勤の代表監査委員として元警視庁生活安全部長、国の官僚OB、公認会計士の五名で構成されています。さらに、監査委員会は八年間で一二五件の監査請求が申し立てられていたが、わずか一一件しか監査を実施していません。

そして、私たちの申し立ても、意見陳述の機会さえ認められない「却下」をされました。監査委員は、事案の具体的検討や実体審理を通じた判断・結果

を出すという役割を果たしていません。私たちはこの結果を不服として東京地裁に提訴しました。訴状のポイント二点を以下に説明します。

① 請求の趣旨

「被告東京都知事は、沖田芳樹に二億二四〇万五九円を、高橋清孝に七八八一万六四三円をそれぞれ請求せよ」。これは、「派遣された機動隊員への俸給等の支払いは、違法な派遣による違法不当な公金支出である」という訴えであるため、機動隊員の給与支給権者である警視總監が東京都に損害をもたらしたとして、都知事にそれを請求するよう求めることとなります。もちろん、この請求が通るとは思えませんが、勝ち負けではなく、現状を変えるために必要な、私たちの意思表示であり、実態を伝える場の一つとして考えます。

② 公金支出の違法性——本件派遣は違法

警察法第六〇条第一項「都道府県公安委員会は、警察庁又は他の都道府県警に対して援助の要求をする事ができる」は、都道府県公安委員会の専権です。沖縄県は、基地はいらないと明確な意志を何度も示しています。つまり本派遣は、沖縄県が必要としたものではなく、政府が住民合意の取れないヘリパッド工事を強行するために機動隊を投入し、現地の抗議行動を弾圧・排除する目的のもとに実行されたと考えます。

また、「都道府県警察の本質的性格が、自治体警察である」(警察庁長官官房「警察法解説」(新版))

より)。東京都が給与支払いの義務を負う警視庁の警察官が自治体警察という原則から見れば、派遣は制限的であるべきで、災害救助でもないのに五か月以上も他県に派遣されることは認められません。

この行動の重要な点は、私たちの都税から給与を受け取る機動隊が、沖縄の新基地建設を強行するために派遣されたことに、行政手続きを通して抗議した事です。好むと好まざると、私たちは沖縄への基地を押しつける立場にあり、「沖縄差別」が顕著に示された機動隊派遣に拒否を示すということです。同時に、様々な社会運動の中で、市民に対する警察権力の介入・弾圧を認めないという意思表示に繋がると考えます。

二〇一五年一月にも、工事一時中止までの約四カ月、警視庁機動隊は、辺野古でも高江と同様の暴力性を見せています。なぜ、私たちは二度もこれを許したのでしょうか。長い年月、沖縄の人たちが訴えてきたことは、このような差別のシステムを、私たちみずから断ち切ってほしいということでもあるはず。私たちの監査請求について、渡辺豪氏がAERA(二〇一六年一〇月二四日号)で「沖縄のヘリパッド建設強行に立ち上がった意外な人とは？」というタイトルで紹介してくれました。いつまでも「意外」な人という立場でいたくはありません。

この思いに賛同してくださる全てのかたに呼びかけます。第一回口頭弁論の日取りが決まりました。裁判官に圧力をかけなければ、再度、審議なしに訴えは退けられかねません。まずは二月二五日の決起集会、そして三月八日一〇時半からの地裁前アピール、同日一一時半からの口頭弁論に是非、ご参加ください。 <http://juninkansaseikyuu.wordpress.com>

1月1日〜1月31日

1月1日〜1月31日

【1月1日】

天皇、皇族◆「新年祝賀の儀」が皇居・宮殿で開かれ、徳仁、雅子と秋篠宮、紀子、眞子、佳子ら皇族が明仁、美智子にあいさつ。明仁、美智子が、皇族と共に宮殿の各部屋を回り、安倍晋三首相や閣僚、衆参両院議長、最高裁長官から「祝賀」を受ける。宮殿を訪れた各国の駐日大使らから新年のあいさつを受ける。

【1月2日】

天皇、皇族◆「新年一般参賀」が皇居で行われ、明仁が宮殿・長和殿のベランダに立ち、あいさつ。美智子や徳仁、雅子、秋篠宮、紀子と眞子、佳子ら成年皇族と共に並ぶ。前年10月に死去した三笠宮の妻百合子は服喪期間のため欠席し、息子の妻で故寛仁の妻信子や故高円宮の妻久子、孫も参加せず、明仁の弟の常陸宮は車いすに乗り、妻の華子と共に最初の2回だけ加わったと報道。明仁、美智子が夜、皇太子一家と秋篠宮一家を皇居・御所に招き、共に夕食。

【1月4日】

神宮参拝◆安倍晋三首相が伊勢神宮を参拝。世耕弘成・経済産業相ら閣僚が同行し、外宮、内宮の順に参る。

安保法◆集団的自衛権の行使を容認した閣議決定と安全保障関連法は違憲として、無効確認などを求めた元三重県職員の男性が、一審津地裁と同様に訴えを退けた

名古屋高裁判決を不服として上告。

東京五輪会場◆宮城県の村井嘉浩知事が記者会見で、2020年東京五輪で宮城開催が決まっているサッカー1次リーグの会場を巡り、仮設として扱われる可能性がある設備の費用は17年度当初予算に計上しない方針を表明。

【1月5日】

東京五輪会場◆神奈川県黒岩祐治知事が定例記者会見で、2020年東京五輪・パリンピックの仮設施設の整備費について「予算化する必要はない」と述べ、17年度当初予算案に計上しない方針を表明。「元々、われわれが負担する話はどこにもなかった」。

【1月6日】

「生前退位」◆中央府省庁の事務次官連絡会議が首相官邸で開かれ、普段出席しない内閣法制局の横島裕介長官と宮内庁の山本信一郎長官が参加。政府は20日「召集」の通常国会で、明仁の退位を巡る法整備を目指しており、両長官の出席は、法案の準備や国会審議に備えて政府内の意思疎通を図るのが狙いで、山本長官が、皇室関連行事での各省庁の協力に謝意を伝えたと報道。

東京五輪◆横浜市の林文子市長が定例記者会見で、2020年東京五輪・パリンピックの仮設施設の整備費について、17年度当初予算に計上しない方針を明らかに。

かに。

「慰安婦」問題◆韓国のソウル行政裁判所が、「従軍慰安婦」問題に関する2015年末の日韓合意に至る交渉記録について「歴史的、社会的に非常に重大な事案」だとして、韓国外務省に開示を命じる判決を言い渡す。

日韓関係◆政府が、韓国・釜山の日本総領事館前に「慰安婦」被害を象徴する少女像が設置されたことを受け、当面の措置として長嶺安政・駐韓大使を一時帰国させる対抗措置を決定。日韓合意の誠実な履行に反すると判断したとして、菅義偉・官房長官が記者会見で明らかにし「日韓関係に好ましくない影響を与える。領事機関の威厳などを侵害する。極めて遺憾だ」。金融危機時にドルなどを融通し合う「通貨交換協定」の再開に向けた協議も中断するほか、森本康敬・釜山総領事の一時帰国、領事館職員による釜山市関連行事への参加見合わせ、日韓の経済協力や次官級で話し合う「日韓ハイレベル経済協議」の延期の措置を決める。

オスプレイ◆在日米軍が、前年12月の不時着事故を受けて休止していた米軍普天間飛行場所属の新型輸送機オスプレイによる空中給油訓練を再開。

【1月8日】

明仁、美智子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所初日の取組を観戦。

「生前退位」◆明仁の退位を実現する一歩限定の特別法を巡り、政府が同法の根拠規定を皇室典範の付則に置く案を検討し

ていることが分かる。関係者が明らかに。

【1月9日】

日韓関係◆政府が、韓国・釜山の日本総領事館前に「慰安婦」被害を象徴する少女像が設置されたことへの対抗措置として、長嶺安政・駐韓大使と森本康敬・釜山総領事を一時帰国させる。長嶺大使が韓国の金浦空港で記者団に少女像設置について「極めて遺憾だ。これから一時帰国し、日本で関係者と打ち合わせを行う」。

／韓国最大野党「共に民主党」の禹相虎・院内代表が、安倍晋三首相が「従軍慰安婦」問題の日韓合意に基づき日本が10億円を韓国に拠出したことを挙げて韓国に少女像の撤去などの対応を求めたことに対し「10億円を返そう。金のために国民が恥づかしい思いを抱え生きていかねばならないのか」と述べ、合意を破棄すべきだと主張。

【1月10日】

天皇、皇族◆トランプ次期米大統領の就任を機に離任するキャロライン・ケネディ駐日米大使が皇居・御所を訪れ、明仁、美智子に別れのあいさつ。東京・元赤坂にある東宮御所を訪問し、徳仁、雅子にあいさつ。

彬子◆宮内庁が、故寛仁の長女彬子が風邪による高熱やぜんそくの発作で入院していた京都府立医科大学病院を退院したと発表。

「生前退位」◆明仁の退位を巡り、2019年1月1日に徳仁が新天皇に即位し、同日から新元号を適用する案が政府内で浮上していることが分かる。政府

関係者が明らかに。菅義偉・官房長官が記者会見で、改元時期に関し「有識者会議に、陛下の公務負担の軽減を最優先で静かに議論してもらっている。方向性も示されていない段階だ」。

安保法◆集団的自衛権の行使を可能とする安全保障関連法は憲法に違反し、平和に生きる権利を侵されたなどとして、大分県民ら42人が、国に1人当たり10万円の損害賠償を求めて大分地裁に提訴。

【1月11日】
天皇、皇族◆「講書始の儀」が、皇居・宮殿「松の間」で開かれ、明仁、美智子が参加。徳仁や秋篠宮、紀子、眞子、常陸宮夫妻のほか、最高裁長官や閣僚、日本学士院関係者らが傍聴。

明仁、美智子◆菅義偉・官房長官が記者会見で、明仁、美智子が春のベトナム訪問に合わせ、帰途にタイに立ち寄り、前年10月に死去したプミポン前国王の弔問をする方向で調整していることを明らかに。宮内庁の秋元義孝・式部官長が、1泊程度の日程で故プミポン前国王の弔問を検討していると明らかに。

徳仁即位◆宮内庁の西村泰彦次長が記者会見で、2019年1月1日に徳仁が新天皇に即位し、同日から新元号を適用する案が政府で検討されているとする一連の報道について「全くの寝耳に水の話」。首相官邸で開かれた天皇陛下の退位を巡る有識者会議の第8回会合に出席しており「有識者会議でまだ譲位（退位）を含めて議論している最中に、ああいう報道が出るのはびっくりしたというのが正直

なところ」。

【生前退位】◆明仁の退位を巡る有識者会議（座長・今井敬・経団連名誉会長）が第8回会合を首相官邸で開き、議論の間まとめとなる論点整理を23日の次回会合で示し、公表を目指す方針を確認。

新元号◆政府が明仁の退位を巡る法整備に絡み、新天皇が即位する半年から数カ月程度前に新元号を発表する段取りを描いていることが分かる。複数の政府関係者が明らかに。政府は「2019年1月1日の新天皇即位、同日からの新元号適用」を検討しており、翌年半ばにも発表することで準備期間を設け、「国民生活」への影響を抑えるとともに、即位と同時に改元を可能にするのが狙いで、明仁は18年12月31日に退位する想定と報道。

【1月12日】
【生前退位】◆宮内庁の山本信一郎長官が定例記者会見で、2019年1月1日に新天皇が即位し、同日から新元号を適用する案が政府で検討されているとの報道に「そういうことは承知もしていないし、理解を超えろ」としか言えない。明仁の退位を巡る有識者会議で議論が続いていることを強調。「そういう時点で報道が出ていることは、非常にびっくりし、全く理解できない」。退位後の呼称に関する報道について問われ「仮定の議論になる。答える立場には現時点でない」。政府が、明仁の退位後の呼称に「上皇」を使う案を検討していることが分かる。新たに皇位継承順位1位となる秋篠宮の処遇を「皇太子」と同等にする方向で調整しており、

退位を一代に限る特別法が成立すれば、明仁の住居など必要な環境整備のためとして、2018年度予算案に関連費用を盛り込む検討に入ったと、関係者が明らかに。

東京五輪会場費◆千葉県の森田健作知事が定例記者会見で、2020年東京五輪・パラリンピックの仮設施設の整備費について、17年度当初予算案に計上しない方針を明らかに。

【1月13日】
天皇、皇族◆「歌会始の儀」が皇居・宮殿「松の間」で開かれ、明仁、美智子や徳仁、秋篠宮、紀子、眞子らが出席。

【生前退位】◆政府が明仁の退位を巡り、一代限りを対象の特別法に、退位に至る経緯を特殊事情として盛り込む方向で調整に入ったと、政府関係者が明らかに。

【1月17日】
【生前退位】◆宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、2019年元日に徳仁が新天皇に即位する案が政府で検討されているとの一連の報道に、宮中祭祀と国事行為の「新年祝賀の儀」が重なることを理由に「皇室にとって極めて重要な日。譲位（退位）や即位に関する行事を設定するのは難しい」と否定的な見解を示す。即位の儀式を元日以外にした場合でも、新元号を元日から適用する案に「どういう儀式をやるかもまだ検討していない段階で、答えるのは差し控えたい」。

日韓関係◆政府が、独島（日本名・竹島）に「慰安婦」被害を象徴する少女像を設置する計画が韓国にあることについて、

韓国側に外交ルートを通じて抗議。菅義偉・官房長官が記者会見で明らかに。

【1月18日】
明仁、美智子◆東京・上野の国立科学博物館を訪れ、クロマニヨン人が描いたラスコー洞窟の壁画を紹介する特別展「世界遺産ラスコー展」を鑑賞。

【生前退位】◆政府が、明仁の退位の時期について2018年12月23日の天皇誕生日とする案の検討に入り、徳仁の即位は即日か翌日が想定され、改元は越年し、19年1月1日からの新元号適用を軸に調整を続けると、政府関係者が明らかに。

【1月19日】
明仁、美智子◆皇居にある皇宮警察本部の武道場「済寧館」で、皇宮警察の創立130周年を記念する武道大会を観戦。

徳仁◆東京都新宿区の学習院女子大で「歴史の山旅を楽しむ」と題し、学生ら約150人を前に講義。

【生前退位】◆衆参両院が、明仁の退位を巡る法整備に関し両院正副議長と8党、2会派の幹事長らによる合同会合を国会内で開き、今後の議論の進め方を協議。議長側が2月中旬以降、各党から個別に意見聴取し、3月上旬をめどに国会としての見解をまとめる方針を示し、大筋で了承される。

【献上品】◆福井県特産の冬の味覚「越前ガニ」を明仁、美智子や皇族に贈るため、同県坂井市の魚問屋で、釜ゆでの作業が行われる。

【1月20日】
明仁、美智子◆2月28日から6泊7日の

日程でベトナムとタイを訪問することが、閣議で決定。安倍晋三首相が「両国との以前からの親密な友好親善関係が一層深まるものと確信している」との談話を発表。

東北震災追悼式◆政府が主催し、3月11日に東京都千代田区の国立劇場で行う「東日本大震災6周年追悼式」に、秋篠宮、紀子が出席することが閣議で決まる。明仁、美智子は出席しないと報道。

明仁◆参院本会議場で行われた第193通常国会の開会式に出席。

【1月22日】

反五輪デモ弾圧◆デモ行進を警備中の警察官に暴行したとして、警視庁公安部と赤坂署が、公務執行妨害の疑いで男性を現行犯逮捕。デモの主催は「反五輪の会」で、2020年の東京五輪・パラリンピック開催に反対し、JR原宿駅前から五輪のメインスタジアム建設現場周辺を通るコースでデモが行われたと報道。

【1月23日】

明仁、美智子◆皇居・宮殿で、農林水産祭の天皇杯受賞者7組と面会。

「生前退位」◆明仁の退位を巡る政府の有識者会議（座長・今井敬・経団連名誉会長）が首相官邸で開いた第9回会合で、議論の中間まとめとなる論点整理を了承し、公表。退位を容認する積極的意見を明記した上で「明仁一代限り」が有力とする内容で、全ての天皇を対象とする退位の恒久制度化には異論を列挙し、困難視する立場を示したと報道。

【1月24日】

秋篠宮◆横浜市中区で開かれた日本動物園水族館協会の研究会に出席。横浜・八景島シーパラダイスを訪れ、視察。

【1月25日】

「生前退位」◆明仁の退位を巡り衆参両院が、正副議長と8党2会派の代表者による合同会合を国会内で開き、政府の有識者会議が公表した論点整理の具体的内容について、菅義偉・官房長官から聴取。

歴史認識◆韓国の大韓体育会が、札幌市などで2月に開かれる冬季アジア大会で南京大虐殺を否定する書籍が置かれたアパホテルが選手村として使われることを問題視し、大会組織委員会と日本オリンピック委員会に是正措置を求める書簡を送ったと明らかに。書籍には「従軍慰安婦」は強制連行されていないとも記述されていると報じられ、書籍が置かれたアパホテルが宿所に使われるのは「スポーツの基本理念を傷つける行為」だと主張したと報道。

【テロ対策】

◆安倍晋三首相が参院本会議の代表質問で、2020年東京五輪・パラリンピックの「テロ対策」として「共謀罪」の構成要件を厳格化したとする「テロ等準備罪」を新設する「改正」組織犯罪処罰法の成立が必要との認識を表明。法整備に加え「逃亡犯罪人引き渡しや捜査共助、情報収集で国際社会と緊密に連携することが必要不可欠だ」。

【1月26日】

皇位継承◆安倍晋三首相が衆院予算委員会で、皇位を安定的に継承する方策として、戦後に皇籍を離れた「旧宮家（旧皇

族）」の復帰が選択肢になり得るとの認識を表明。「これも含めて今後議論してもらえば、また検討していきたい」。明仁の退位を巡る論議とは切り離す考えを示す。

皇位継承の維持に関し「男系継承が古来例外なく維持されてきたことの重みなどを踏まえつつ、今回の（退位の）議論とは切り離して引き続き検討したい」。

【生前退位】

◆宮内庁の山本信一郎長官が定例記者会見で、明仁の退位が実現した場合には、新天皇の即位を元日に行うことは、宮中祭祀と国事行為の「新年祝賀の儀」が重なることを理由に「難しい」との見解を示す。政府が退位の時期を18年12月23日の天皇誕生日とする案の検討に入ったとする報道について問われ「高齢となった天皇のありようをどうするのかということ」を政府、国会で検討している最中なので、一足飛びに譲位（退位）の期日を議論する段階にはない。／明仁の退位を巡り、自民党が、役員会メンバーの幹部ら14人による懇談会の初会合を党本部で開く。大島理森・衆院議長が各党の意見聴取を始める2月中旬に結論を出す方針を確認。

朝鮮学校◆大阪府内の朝鮮学校10校を運営する学校法人「大阪朝鮮学園」（大阪市東成区）が、大阪府と大阪市による補助金の不支給決定の取り消しや支給の義務付けなどを求めた訴訟の判決で、大阪地裁が訴えを全面的に退ける。学園側が「教育への不当な政治的介入に当たると主張した点について「学園を狙い撃ちした措置ではない」「生徒や保護者らの経済

的負担は懸念されるが、要件を満たさない以上、不支給となるのはやむを得ない」。

【1月28日】

「生前退位」◆明仁の退位を実現する法整備を巡り、政府が退位後の「公務」の在り方について条文に盛り込まない方向で検討していることが分かる。政府関係者が明らかに。新天皇との併存で権威が二元化する懸念に対し、宮内庁が「象徴としての行為」を全て譲るとの見解を表明しており、政府は法律上の制限がなくても、新天皇の象徴としての地位は確立できると判断しているもよう報道。

【1月30日】

明仁、美智子◆静養のため、神奈川県葉山町の葉山御用邸に入る。

明仁◆宮内庁が、明仁が早朝に微熱があったため、午前1時に予定していた宮中祭祀への出席を取りやめたと発表。皇居・皇霊殿で孝明天皇例祭への出席を予定していたが、宮中祭祀を所管する掌典次長が代行したと報道。

「女性宮家」◆民進党の野田佳彦・幹事長が記者会見で、女性皇族が結婚後も皇室にとどまる「女性宮家」創設など皇位を安定的に継承する方策を協議する場を国会に設置するよう提案。

男系継承◆安倍晋三首相が26日の国会答弁で、戦後に皇籍を離れた「旧宮家（旧皇族）」の復帰が選択肢になり得るとの認識を示したことに関し、民進党の野田佳彦・幹事長が記者会見で「70年以上前に宮家から離脱された方を受け入れるのは感情的に相当難しい」。

美空の「真相」

再稼働阻止ネット全国相談会と 関電包囲行動

.....

一月二一・二二日の土・日、「再稼働阻止全国ネットワーク」の全国相談会が大阪で開催された。これは二二日の「高浜原発うごかすな！関電包囲全国集会」とデモ（主催・実行委）にあわせて持たれた行動である。

高浜原発再稼働をめぐる攻防は正念場を迎えようとしている。反原発を闘っている人々をばねとした司法の決定（大津地裁の3・4号機仮処分決定の判決）、これの大阪高裁での逆転をねらっている関西電力に対して、大きな抗議の声をぶつけるための集まりだ。

中之島公園での集会（四五〇人参加）の後、すぐに関電ビルに向かったデモ行進、スタートと同時に雨が降り出したが、ゲシヨゲシヨになりながらの力強いデモ行進が繰り広げられた。その後、強風吹きささぶ中で二時間近いビル前抗議集会。それでも怒りの抗議行動に参加する人は、増大することはあっても減ることはなかった（主催者発表千人参加）。

「全国相談会」は、高浜原発再稼働阻止のための全国的協力体制づくりのための「相談」のみならず、川内・伊方・玄海・泊などの原発立地各地の、力強い戦いの報告が（交流）する場となった。首都圏

からの参加者は三二名、関西からの参加者は三五名、全国各地の参加者は二四名。

原子力規制委（各地支部・電力会社・各地支店）への全国同時抗議行動のプラン、全国的に取り組み抗議ハガキ活動など、「相談会」ではおなじみになりつつある行動についての確認と調整がなされた。次の相談会については、原発ターゲットの集まりではなく、再稼働をめぐる（3・11）以後の長い活動の運動的総括を（分科会方式での緻密な討論の場をつくる）。そういう方針が、首都圏側から提起され、東京で四月・五月中にというプランが全体で確認された。

二日後に東京で「再稼働ネット」の事務局会議が持たれたが、大阪行動への参加者の五人が風邪で欠席（ただし闘病中の私は幸運にも風邪をひかずにすんだ）。とにかく、たいへんな闘いであった。

（天野恵一）

オリンピックおことわりー！ 集会とデモ

.....

一月二二日、「二〇二〇オリンピック災害」おことわり連絡会（東京オリンピックおことわりリンク）の結成集会が千駄ヶ谷区民会館で開催された。この「おことわりリンク」は、昨年八月の「おことわり・東京オリンピック」集会報告を本欄にも掲載したが、その集会で新たなネットワーク形成を呼びかけ、数ヶ月の準備を経て作られたものだ。

集会は、「二〇二〇年まで頑張るぞ」の

気持ちも込め、少し趣向を凝らした「Read in Speak out」。これは、発言者のみなさまにあらかじめ読み上げる文章を用意していただき、当日はそれを読み上げ（Read in）、それにコメントをつけていただく（Speak out）というもの。一人八分の「Read in Speak out」。発言者二一人、ビデオ参加三人。発言者の数だけオリンピックに対する視点も提示され、とても興味深く、また面白く、次々と違う課題が提示されるにもかかわらず、すんなりと頭に入ってくるリズムの良さがあつた。登壇される方の準備はとても面倒な（？）と

モが企画され、デモ・集会と連続の行動となった。デモでは不当逮捕という弾圧も。非拘束者は三日で釈放されたものの、オリンピックが単なるスポーツイベントではないことが、逆に見えてくるような状況もつくり出された。詳細は、反五輪の会、おことわりリンクの抗議声明を参考にされたし。

おことわりリンクのブログには、当日の集会の様子が動画等々すでにアップされている。集会の詳細もあわせ、ぜひそちらをご覧ください。

<http://www.2020kotowalink/>

（大）

正念場の年明け、 沖縄と連帯する行動を展開

.....

昨年一二月二〇日、最高裁は、翁長知事が辺野古埋立て承認を取り消したことを違法とする判決を下した。それを受けて年明け早々から基地建設の工事が再開。辺野古、大浦湾には、鉄製取っ手の付いたフロート（浮き具）が再び張り巡らされた。抗議するカヌーや抗議船の人々にはまたもや海保の海狼が襲いかかり、暴行、拘束を繰り返している。

政府は、岩礁破碎許可が切れる三月前に、汚濁防止膜固定化という名目で、一〇tものコンクリートブロックを投下するといふ。またもや珊瑚が破壊されようとしている。

沖縄の人々もまた年明け早々から辺野古の海やキャンプシュワブゲート前で抗

議、阻止行動を開始。リーダの山城博治さんやテントのスタッフが逮捕、起訴され、異常なまでの長期勾留がなされる中でも、団結を固め、明るく、粘り強い行動に取り組んでいる。

こうした厳しい状況に対し、私たちも年明け早々から連帯の闘いに取り組んできた。

「仕事始め」の一月四日、本年第一回目の防衛省行動だ。寒波が襲う中、二〇〇人以上が参加。沖縄からはヘリ基地反対協議会共同代表の安次富浩さんが、「あきらめない、しなやかで非暴力

が私たちの闘いだ」という熱いメッセージが届けてくれた。また、首都圏でもオスブレイの配備が近づく状況の中で、横田や厚木、習志野で配備反対に取り組んでいる仲間からのアピールも受けた。

一月二四日には、Shojo 辺野古埋立てキャンペーン呼びかけの大成建設前抗議行動が行われた。フロートの設置や中仕切り岸壁工事、汚濁防止膜工事など二〇〇億円を超える工事を請け負っている大成建設は、工事中止と説明責任を求める抗議・申し入れ行動を全く無視、開き直りの態度を続けている。今後本体工

事もかなり請け負うとみられる同社に対して、「基地建設工事の受注を撤回し、工事の即時中止」を求める要請書が読み上げられた。

二九日は月例の新宿デモ。デモに先立ちアルタ前でアピール行動が行われ、機動隊の高江派遣を違法とする住民訴訟、デマ放送で沖縄への偏見をおおる「TOKYO MX」に対する抗議行動、宮古・石垣島への自衛隊配備に反対する仲間などから発言があった。また沖縄出身のミュージシャン・豊岡マッシーさんの三線演奏と唄が奏でられた。

デモには三〇〇名の人々が参加、新宿駅周辺に、高江のヘリパッド建設を許さない！安倍政権は辺野古新基地建設を断念しろ！という訴えが響いた。

基地建設が本格化する今年は正念場の年だ。沖縄の人々と連帯し、決してあきらめず、沖縄差別に抗し、ヤマト・東京での闘いを繰り広げていこう。

(中村利也／辺野古への基地建設を許さない実行委員会)

1月9日(月) ● 道場親信の思想と仕事

「学習会報告」

加納実紀代・天野恵一編『平成天皇の基礎知識』

(社会評論社、一九九〇年)

裕仁の重病が露呈し、「自粛」強制とともにXデー過程が開始して、天皇制の問題が様々な社会運動の中に共有されていった時期に、運動の立場から準備され、その問題意識を集めていったアンソロジーと資料集である。

明仁が即位の後に「護憲」を語ったことによって、国粹主義と侵略戦争を代表しながら戦後憲法体制において「象徴」の地位にあった昭和天皇裕仁と、「平成」を切断させようとする論が、それまで天皇制などに批判的であった人々からも流布されていた。

時代だ。ベルリンの壁の崩壊などの世界的変動の時代状況とも重なって、より積極的な意味づけがされようとしていたのだ。

しかし、「平成」への代替わりは、即位や大嘗祭の経過にも明らかかなように、政教分離の原則を掘り崩して、捏造にまみれた天皇制の「伝統」や皇室祭祀が、国家の正史、国家行事として現前化させられるものでもあった。その既成事実化が憲法解釈を変え、メディアを通じて天皇制への翼賛も演出されていた。

裕仁には不可能だった「国際化」が明仁天皇制に要請され、それが実現させられようとすることへの批判が、多くの論者から挙がっており、いずれも現在につながる問題意識を提示している。

中北龍太郎の「民主主義」を飲み込む『護憲』天皇制は、日米の支配層によって現行憲法に埋め込まれた「象徴」規定が、主権や民主主義の基幹をどれほど毀損してきたかを指摘する。天皇の存在は、解釈上は直接的な権力実体ではないとされながら、ヒトを「象徴」としたことから、国事行為はもちろん、私的行為とされた分野を通じて、基本的人権や民主主義を食い破る存在として拡大した。戦後憲法学は、天皇

制がそのようなものであることを論理的には理解しながら、天皇の存在や行動を合憲とさせるために、解釈を重ねた。

明仁は、皇太子時代から「象徴的行為」論を強調して天皇の行為を拡大解釈してきた。その集大成が八月八日のビデオメッセージだ。天皇のいう「護憲」が、そのコトバとは異なり、私たちの人権や民主主義に对立するものだということを、あらためて突き出していかなばならない。この本は所収の資料も豊富で現在も「使える」ものとなっている。

次回は二月二八日、横田耕一『憲法と天皇制』(岩波新書)を読む。手に入りやすいので多くの参加を。

(蝙蝠)

1月20日(金) ●ドイツの戦後70年・第5回「新左翼とテロリスト」たちの反体制闘争」

1月21日・22日(土・日) ●再稼働阻止全国ネットワーク全国相談会(集会の真相参照)

1月22日(日) ●五輪ファーストおことわり! オリンピックやめろ! デモ(集会の真相参照)

●オリンピック災害おことわり! Read it Speak Out (集会の真相参照)

●高浜原発うごかすな! 関電包囲全国集会(集会の真相参照)

1月24日(火) ●辺野古新基地建設工事再開を許すな! 大成建設抗議行動(集会の真相参照)

1月28日(土) ●1960・1970年代運動・思想史第3回「ベ平連」と小西反軍裁判」

1月29日(日) ●安倍政権は辺野古新基地建設を断念しろ! 新宿デモ(集会の真相参照)

2月4日(土) ●ウォルデン・ペローさん横浜講演会

2月6日(月) ●安倍靖国参拝違憲訴訟第12回口頭弁論

集会情報 INFORMATION

2月11日(土) ●天皇制はいらない! 「代替わり」を問う反「紀元節」行動

13時デモ・15時討論集会/日本キリスト教会館4F(地下鉄早稲田駅)/主催: 同実行委員会(090-3438-0263)

●連続学習会・象徴天皇制を考える

象徴天皇制の魅惑

14時/伊藤晃/つくば市立春日交流センター大会議室(筑波大学付属病院そば)/主催: 戦時下の現在を考える講座(090-841-157)

2月18日(土) ●「日の丸・君が代」の強制をはね返す 神奈川集会とデモ

13時30分/加藤直樹/横浜開港記念会館(みなとみらい線日本大通り駅ほか)/主催: 「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会(090-3909-9657)

2月18日(土) 24日(金) ●第6回死刑映画週間 生きるという権利

各回入替制/ユーロスペース(JRほか渋谷駅)/http://www.eutospace.co.jp/

2月19日(日) ●「復興」の名の下に切り捨てられる人びと

13時30分/黒田節子・満田夏花/会場: 千駄ヶ谷区民会館(JR原宿駅ほか)/主催: 福島原発事故緊急会議(連絡先: ビーブルズ・プラン研究所 03-6245-718)

2月25日(土) ●ジョンチャン五輪を問う(仮)

13時/イ・ギョンリョル、谷口源太郎、鶴飼哲/会場: ビーブルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅、03-6245-718) 主催/主催: 2020「オリンピック災害」おことわり連絡会(090-5052-0270 宮崎)

●東京朝鮮高校生の裁判を支援する会講演会

14時30分/中村一成/文京区民センター(地下鉄春日駅・後楽園駅ほか)/主催: 東京朝鮮高校生の裁判を支援する会(mustokshien@yahoo.co.jp)

●監視庁機動隊の撤退を求める住民訴訟第1回口頭弁論に向けた決起集会

18時開場/文京区民センター(地下鉄春日駅・後楽園駅ほか)/主催: 東京都への住民監査請求実行委員会(junkansenseiky@gmail.com)

2月26日(日) ●天皇代替わりを撃つ連続講座「私からみた沖縄と天皇制」

13時30分/平良カミイ/会場: 千駄ヶ谷区民会館(JR原宿駅ほか)/主催: 反戦反天皇制労働者ネットワーク・関東(hanten_net@yahoo.co.jp)

3月2日(木) ●「道徳の教科化」を問う——安倍政権の危ない「教育再生」

18時45分開場/高橋哲哉/会場: 石神井区民交流センター(西武池袋線石神井公園駅) 主催: 練馬教育問題交流会(090-545-7123 林)

3月4日(土) ●戦争・治安・改憲NO! 3・4集会

18時/額綱厚/文京区民センター(地下鉄春日駅・後楽園駅ほか)/主催: 同実行委員会(連絡先: 03-3591-1301 救援連絡センター)

3月8日(土) ●監視庁機動隊の撤退を求める住民訴訟第1回口頭弁論

11時30分(抽選40分前)/東京地方裁判所(地下鉄霞ヶ関駅)

3月11日(土) ●原発事故隠蔽・責任放棄の3・11「天皇・皇族出席の追悼式典」

反対! 核・原発を止めよう!

13時30分/デモ日比谷公園霞門(地下鉄霞ヶ関駅)・17時/築地社会教育会館(地下鉄東銀座駅・築地駅)/天野恵一、なすび/主催: 同実行委(連絡先: 03-3463-9058 反戦反天皇制労働者ネットワーク)

●東京電力は福島原発事故の責任をとれ! 追悼と東電抗議

14時/東電本店前・16時15分JR新橋駅前/よびかけ: 経産省テント前ひろば、たんばほ舎(連絡先: 03-3389-9035 たんばほ舎ほか)

3月12日(日) ●憲法、平和、そして沖縄 市民意見広告運動集会

13時10分開場/日本教育会館(地下鉄神保町駅)/主催: 市民の意見30の会・東京(連絡先: 03-6235-2030)



●今回も黒貂参上。久しぶりのガウガウキー

キー、下々の世界はいと楽しい(木兔) ●黒貂がいなくてもいつもガウガウキーキーなんだが。でも今日は確かに(鰐)

●作業に集中しているのに耳がぴんとそばだて。半回通やハルミいあぶな(編鰐)

●鰐は静かだったよ。単語だけが耳に飛びこんできて、アハんと反応(鰐)

●楽しく作業ができるのは嬉しい。来月も来られそう。早く暖かくならないかね。

●熊は蜂蜜をなめに行った。

(黒貂)